

(寄稿)

## 可視化に基づく医療システム改革：拠点化と連携の再設計

『急性心筋梗塞の死亡率で高値を示す病院において、同じリーダーのもと循環器内科スタッフの増員と集中治療室の新設などを行った結果、著しい値の低下を示した事例もある』『質を把握し完全にしていくためには、数値や指標を評価と改善に生かそうとするリーダーの姿勢や組織の風土やしぐみが重要である』(本文P4より)

これらは研究成果の一部に過ぎないが、診療データの可視化が医療システムや病院マネジメントのあり方を変えうることを示した成果の一つと言えるのではないだろうか。しかも、これらが医療機関から提出されたレセプトデータにより導き出された結果であることを考慮すれば、その影響力の大きさは、言うに及ばない。

医療事故に関する調査の仕組みが厚生労働省において議論される中、質の評価の研究成果は、診療内容やプロセスの正当性を担保する指標となる。厳しい環境の中で働く医師をはじめとする医療スタッフにとっては朗報と言えよう。

その一方、各医療機関が担う機能が客観的に評価されることで、目指すポジショニングと実際との乖離が可視化される。当然、その乖離が大きい医療機関は、実際に担っている機能に見合った報酬で評価されるような仕組みになると将来予想される。自院に相応しいポジショニング転換の実行力は重要なカギとなる。

本稿は、京都大学大学院医学研究科医療経済学分野 今中教授に寄稿いただき、医療の質の可視化について、研究成果を紹介いただきながら、質の評価の考え方や視点、さらには、質の評価を踏まえた医療機関の拠点化の重要性などを紹介いただいた。

今後、各都道府県では地域医療ビジョンが策定されることになるが、各医療機関においても院内のあらゆる関係者を交えて、今後の病院の方向性を議論されてはいかがであろうか。それに際し、客観的な視点での自院の評価に、本稿が参考になれば幸である。

(市川)

2014年5月19日

Healthcare note

(No. 14-05)

寄稿者名：  
京都大学大学院医学研究科  
医療経済学分野  
教授  
今中 雄一

編集主幹：  
野村ヘルスケア・  
サポート&アドバイザー  
市川 剛志

野村證券株式会社  
金融公共公益法人部